

宇 摩 平 野



四国中央市はかつて「宇摩」と呼ばれていた。

「宇摩郡（うまのこおり）」という地名が初めて文献に見えるのは、8世紀の初めである。河内国古市郡西琳寺文書に「伊予国宇麻郡常里の戸主である金集史挨麻呂（かねあつめのふひとやからまる）が、弟の保麻呂（やすまる）を大和国飛鳥寺（やまどのくにあすかでら）で受戒させ、名前を願忠と改めた。」という記録が残されている。708年のことであり、「常里」とは現在の土居町津根のことである。

つまり「宇摩」は、1300年以上続く歴史のある地名なのである。それ以前は、「馬評（うまのこおり）」と表記していたのではないかとされている。岡山県立博物館には「馬評」という文字が刻まれた須恵器が保管されている。

「馬評」と呼ばれるようになった由来として、一説には、古代、金生川や銅山川で朱金や砂金などを集めていた百済からの渡来人が馬をたくさん飼っていたからだという説がある。渡来人たちは馬についての知識もあり、その飼育も心得ていたので進んで馬を導入、利用していたと考えられる。馬のいる風景を地方の人々は驚異の目で眺め、誰とはなしに馬のいる評（郡）、馬評（郡）と呼ぶようになったのではないだろうか。「川之江郷土物語」に書かれている。

その後、713年に詔が出され、「郡郷里名を二文字の好字にせよ」という動きがあり、この時期に「馬」が「宇摩（麻）」という表記に変わったと考えられる。

また、別の説としては、「古事記」に宇摩志葦牙彦舅尊（うましあしかびひこじのみこと）と宇摩志麻治命（うましまちのみこと）の二人の「宇摩」の文字が使われている神が登場するが、「宇摩」という地名はこれらの神の名の「宇摩」をとったという説もある。ただ、資料がほとんどなく、正確なことは分からないのが正直なところである。